

駒井重格の軌跡——「駒井重格先生小伝」再考——

瀬戸口 龍 一
(大学史資料課)

はじめに

専修大学は、二〇〇九年二月二日から二〇一〇年一月二四日まで、三重県桑名市において桑名市博物館、一橋大学と共同企画展「駒井重格こまいしげたかの軌跡〜専修大学の創立者、一橋の名校長〜」(会場・桑名市博物館)を開催した。創立者の一人である駒井重格の生涯を出身地・桑名において紹介する展示企画が立案されたのは、その二年ほど前のことであるが、その間、大学史資料課では駒井重格に関する調査を各地で行ってきた。

本稿の目的は今回、新たに行った調査をもとに、駒井重格の生涯を捉え直すことにある。重格は四八歳という若さで亡くなったこともあり、まとまった自伝も伝記も残されていない。小峰保栄氏の「駒井重格先生小伝」(以後「小伝」と略) および西羽晃氏「駒井重格について」²⁾という二つの論文のみが、重格の生涯について書かれたまとまったものといえる。そのほか重格の業績については内山宏氏が「フランス財政学の導入と専修学校の人々」³⁾のなかで近代国家において田尻稲次郎と駒井重格が果たした役割を取り上げて

いる程度である。つまり駒井重格という人物はこれまで専修大学の関係者以外ほとんど知られていなかったというのが現状であろう⁴⁾。先行研究を整理すると、「小伝」は昭和五六年に刊行された『専修大学百年史』(以後、『百年史』と略)編纂のために収集した資料をもとに書かれた伝記で、財政学を専門とする小峰氏によって重格の生涯のほか、著作を一点一点取り上げ、経済学史上に位置づけ、詳しい解説が付されている点の特徴である。

一方、「駒井重格について」も『百年史』編纂の過程で、桑名の郷土史家である西羽氏に重格の調査を依頼したことがそのきっかけで執筆されたものであるが、郷土史に詳しい西羽氏らしく菩提寺の調査結果や桑名藩関係の史料から桑名藩士としての駒井家の歴史を中心に記述している。しかし「小伝」の筆者である小峰氏が「資料がまことに少ない」、また西羽氏も「駒井重格については、未だ不詳な点が多く、本稿も未定稿である」と結んでいるように、重格の生涯については不明な点も多く、推測に頼っている箇所が多いことも事実である。そしてこの『百年史』編纂以降、専修大学では、ま

とまった形で創立者の調査を行っていないため、この二つの論文の記述が重格の生涯を語る際の根拠となってきた。

確かに今回の調査でも、重格に関する史料は非常に少なく、調査は困難を極めた。とはいえ、山形県や岡山県で行った調査では新たに発見できた事実もあり、今回の成果を踏まえたくえで、改めて駒井重格という人物の生涯をたどることは展示記録という意味でも十分に意味のあることであろう。

そこで本稿では小峰氏の「小伝」や西羽氏の「駒井重格について」を参考にしつつ、「駒井重格の軌跡」展の準備調査において新たに判明した事実、また展示を記念して開催した西羽晃氏（桑名市文化財保護審議会会長）、永江雅和氏（専修大学経済学部教授）、西沢保氏（一橋大学経済研究所教授）の三人による記念講演会の内容を加え、重格の生涯を追うとともに、彼の業績を教育史上、経済学史上に位置づけることとしたい。

1. 桑名藩士・駒井家のあゆみ

まず、駒井家とはどのような家柄であったのかを述べる。西羽氏によると、駒井家は駒井官大夫が正徳五年（一七一五）に二〇〇石で松平越中守家に召し抱えられたことに始まるという。時の当主は松平定遠。桑名を離れ、越後高田を領地としていた。高田藩領内の柏崎はその後、桑名藩の飛び地領となり、後述するが戊辰戦争時の桑名藩軍の集結場となる。

確かに西羽氏がいうように、駒井家は官大夫（三代目まで同名）から始まると考えることができるが、桑名藩士の由緒をまとめた『天明由緒』にある駒井武吉（乗邨、号鶯宿）の由緒は次のような文言から始まる。

駒井武吉由緒

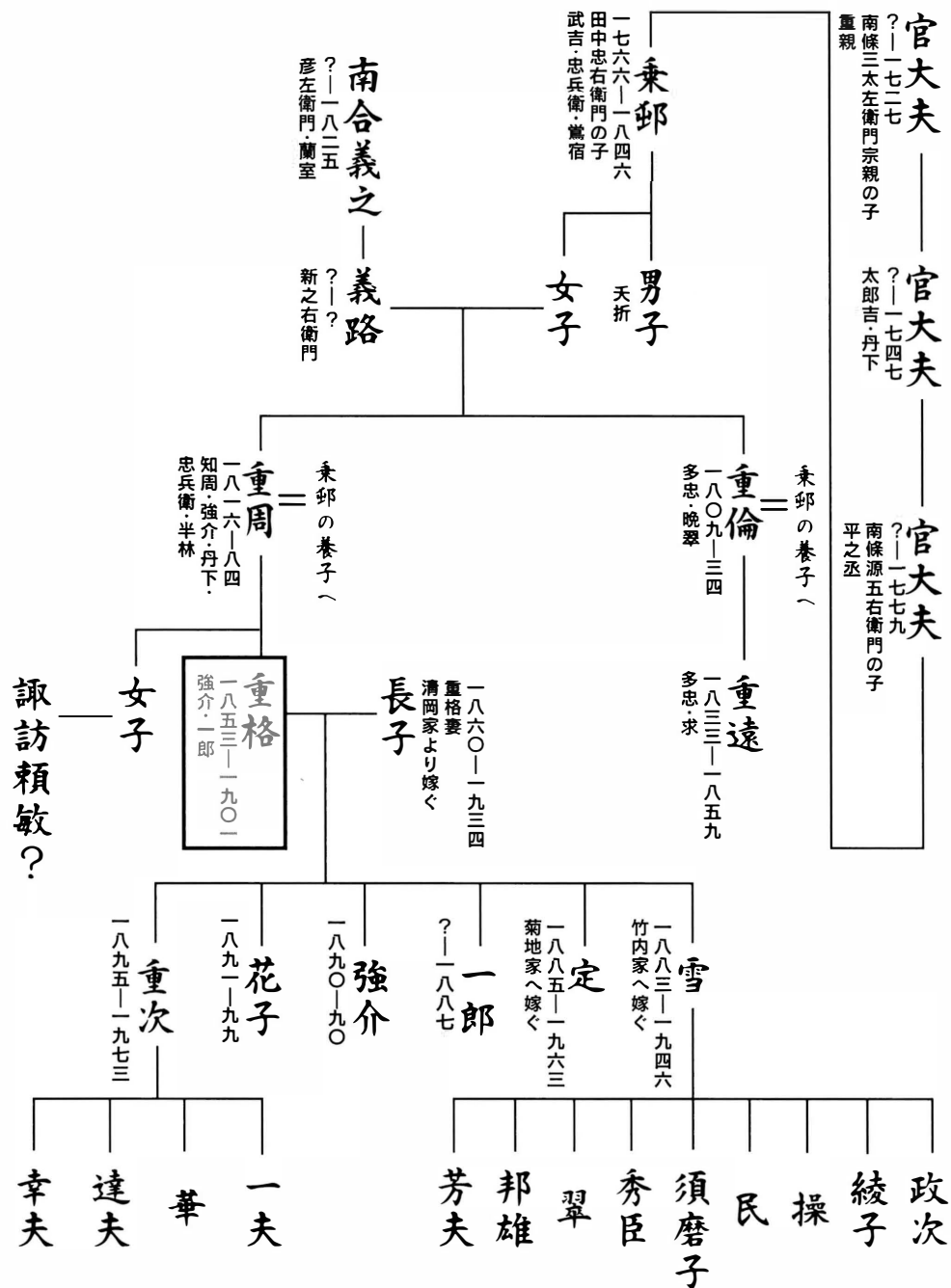
駒井求馬儀 松久院様御由緒之者付

円鏡院様御代 斎聖院様御小姓被 召出、銀十枚五人扶持被下置候、元禄六年新知百石被下置御扶持被居置、其後三十石御加増被下置、御近習十九年相務、同十六年御内意を以奥平八郎左衛門養子罷成申候、八郎左衛門由緒書詳なれハ略之。

この史料によると、駒井家の家祖として名前が挙げられた求馬は、松平越中守家の三代松平定重（法号・円鏡院）の継室であった松久院の生家の人間であり、定重の時代に斎聖院（定重五男・定遠）の御小姓として銀一〇枚五人扶持で召し抱えられた。しかし元禄一六年（一七〇三）に藩命により奥平八郎左衛門の養子になったと書かれている。奥平家は松平越中守家の祖・定勝の正室に繋がる家柄であり、藩内でも由緒ある家であった。

『天明由緒』にある「八郎左衛門由緒書」には当初、求馬は「貞隆儀駒井氏之嫡子御座候へハ、養子罷越候駒井名字断絶仕候付、

◆ 駒井家系図 ◆



※『天明由緒』『桑名市史』『本の籬』『長寿院過去帳』『戸籍記載事項証明書』『御家中永代福寿分限帳』などをもとにして作成

此儀如何可仕哉^与申上候」と、貞隆（求馬）は駒井家の嫡子で、養子に行くとなると駒井家は断絶してしまいますが、どういたしましうかと尋ねている。それに対して、定達は「駒井名字之義ハ追^而貞隆二男三男も御座候ハ、其内^而名字御立可被下候由」と、貞隆には二男も三男もいるので、彼らに駒井家を継がせれば良いと答えている。では求馬の後の駒井家はどのようなようになったのであろうか。つづけて駒井家の由緒を見てみよう。

一 曾祖父

駒井官大夫

右実方由緒之儀南條三太左衛門同事^二御坐候、駒井^三相改候儀者
松久院様駒井之御苗字断絶仕候付、御苗字被下置候旨被仰出候
駒井^与相改申候、 斎聖院様御代正徳五末年南條元庵義隠居
仕候刻被召出候、其節南條貞右衛門^被下置候知行式百石被下
置候、同年御使番役被 仰付候、享保九辰年御物頭^二被仰付、
同十二年病死仕候

求馬の跡を継いだのは、求馬こと八郎左衛門の二男や三男ではなく、官大夫こと南條三太左衛門という人物であった。この由緒書によると駒井家が断絶することを憂えた松久院が、同じく松平越中守家に仕える南條三太左衛門（重親）に駒井の苗字を与えたとある。つまり、他家から来た官大夫が継いで始まった新たな駒井家こそが、重格に繋がる駒井家であると西羽氏は考えたのだらう。

南條家の由緒書には、重親の父・宗親は延宝年間（一六七三〜一六八〇）に松久院の「御枢機」により召し抱えられたとあるように、南條家もまた松久院と縁戚関係にあったと思われる。このように駒井家は松久院と深い繋がりがあったことがわかる。以後、駒井家は代々、御使番や御小姓役、御馬廻役など、藩主や世子、大奥の側に仕える役を拝命してきた。

駒井家は詩歌や文学などに秀でた人物を多く輩出してきた。なかでも著名な人物として先ほどの『天明由緒』に駒井家の由緒書を提出した人物として登場する武吉こと駒井家四代目・乗邨（求馬から数えると五代目）がいる。

駒井乗邨、号は篤宿、通称・忠兵衛は、明和三年（一七六六）、松平越中守家の家臣・田中忠右衛門の次男として奥州白河に生まれ、駒井家を継いだ人物である^一。御小姓役、記録役、大目付、江戸詰奉行などを歴任し、奥州白河から桑名へ転封された際には、江戸家老の代理役として先発して庶務などを担当したという。乗邨の博覧強記ぶりは、藩内でもよく知られており、在職期間は六八年、定邦・定信・定永・定知・定猷^{さだなほ}という五代にもわたる当主に仕えた。

乗邨が書き残した多くの書物のなかでも代表作といわれる『篤宿雑記』は、約六〇〇巻にもおよび、文化一二年（一八一五）から乗邨が亡くなる直前までの、約三〇年にわたって書き続けられた記録である。その内容は徳川家や松平越中守家の故事来歴や有職故実、世上の風聞、紀行文など雑多なものであるが、その特徴は白河や桑

名など地域に関する記事が多いことで、当時のこの地域を知るうえで非常に有益なものといえよう。

『鶯宿雜記』には「桑名城内／駒井家蔵」「東京浅草／駒井家蔵」「駒井氏蔵」などの朱印が押されている。これほどの大部の記録の執筆には、数多くの書物が必要であったことはいうまでもない。

江戸時代後期は考証学の流行とともに、蔵書家たちが登場した時代でもある。特に幕府の老中として「寛政の改革」を推し進めた松平定信の周辺には多くの蔵書を持ち、大部の記録を執筆する人々が多く集まっていた。定信に仕えていた乗邨もそのような人々の一人と考えられ、この朱印によって駒井家には蔵書があったことを知ることができる。おそらく乗邨の時代に集めたものと思われるが、残念ながら現在その存在を確認することはできない。

なお、明治七年（一八七四）二月二日に重格が父・重周に当てる書簡⁹の宛先には「東京浅草新福井町一番地」とある。このことから重周が浅草に住んでいることがわかり、「東京浅草」の印はこれに拠るものと思われる。この浅草新福井町には江戸時代、秋田久保田藩の上屋敷があったが、明治三〇四年には桑名藩に下賜された桑名藩ゆかりの場所であった。

そのほか西羽氏によると「南合家は藩校の教授を代々務めた学書の家系」¹⁰で重倫（号・晩翠）、重格の父・重周も儒字者として、詩歌をこよなく愛したという。

南合家とは、乗邨の後、駒井家を継いだ重周の老家である。この

家も松平越中守家が初めて桑名を治めた際の当主・定綱（定綱系久松松平家初代）の時から同家に仕える家柄で、重倫は重周の兄、重格の伯父にあたる人物である。重格が後に学者、教育者の道に進んだのは、駒井家の血筋であったともいえよう。

2. 駒井重格に関する基本的史資料と生年月日について

重格の生涯をたどる前に、これまで彼の生涯を知るために使用されてきた二つの重要な史資料を挙げる必要があるだろう。一つは重格の墓碑に刻まれた略歴（以後、「墓碑文」と略す）ともう一つが一橋大学所蔵の「官吏履歴書」（以後、「履歴書」と略）である。前者は重格の略歴をよく示す資料としてしばしば引用されてきた。特に重格が若くして家を継ぎ、戊辰戦争に従軍したというような履歴はこれまでこの資料以外に見ることができなかった。

後者の史料についてはその名称の通り、内容は官吏としての履歴に限定されており、桑名藩士時代の履歴や専修学校（専修大学の前身）教員としての履歴は記されていない。しかし、官吏としての履歴は行賞や叙勲も含めて詳細に記されており、明治一〇年代以降の重格の生涯をたどるうえで欠くことのできない史料といえる¹¹。ここでは紙幅の関係上「墓碑文」のみを掲げておく。

君諱重格、旧桑名藩士、以嘉永五年壬子八月廿一日生、考諱重周、以俊敏好学為闔藩所推、妣日下部氏、有婦德善訓其子、君

年甫十五嗣家、翌年戊辰乱起、君属藩兵隊、転戦各地、頭角漸然披露、明治七年君随旧藩主松平公赴米国、留学四年而帰、無幾歴任岡山県中学校長師範学校長及商業学校長、大蔵書記官、大蔵省参事官、国債局長、農商務省参事官等、三十一年任高等商業学校長、兼大蔵省参事官、三十四年十二月叙従四位、叙勲四等、賜瑞宝章、君天資聰明、通和漢英仏各書、最邃経済学、帝国会計法規之改正起案、其他財政各般臨時調査、君每列為委員能効其力、若使其健而長生、則其所効必不止此也、不幸溘逝、誰不惜之、君娶清岡氏孝五子、嗣子重次尚幼、長女雪適竹内氏、次女定未嫁、余皆殤、三十四年冬、君病肋膜、十二月九日終不起、享年四十九、葬于谷中瑩域、先是君与同志諸名士謀設学校、専教授経済法律商科者廿余年于茲、校運弥進、専修学校之名大著焉、君之力実与居多、君所講述、有経済考徴、支那貨幣考、経済学要論等、又所訳有歳計予算論等、皆行于世、今茲君之親戚、来囑正武以墓表、正武与君交久矣、誼不得辞、乃謹表之

明治三十五年十二月

小山正武謹撰

林経明謹書¹²

撰者である小山正武は重格と同じ桑名藩士で、戊辰戦争に従軍後は大蔵官僚として活躍した人物。また書者の林経明も大蔵官僚として後述する田尻稻次郎や阪谷芳郎の側近として力を発揮した人物である。重格は後に大蔵官僚となるが、彼を取り巻く大蔵省の人々に

よってこの墓碑が刻まれたことがわかる。

実は、重格の生年月日および出生地については諸説ありはっきりしない。生年月日については①墓碑文にあるように嘉永五年（一八五二）八月二日、②「戸籍記載事項証明書」¹³にある嘉永六年（一八五三）八月二日、最後に③「履歴書」にある嘉永六年一月という三説である。出生地も桑名生まれと江戸生まれの二説ある。いずれの史料が正しいのかは不明である。西羽氏はその根拠は明らかにしていないが、「一部に嘉永五年生まれともあるが、六年が正しいと思う」と述べている。また重格が亡くなった際、各新聞は訃報記事を掲載したが、ほとんどの新聞で、重格を嘉永六年一月、江戸生まれとしていた。唯一『二六新報』だけが嘉永五年八月生まれとしている。

しかし後年、重格がアメリカに留学する際、外務省が発行した海外渡航証の控には「齡 二十二年一ヶ月」とある。後述するが、重格がアメリカに渡航するのは明治七年のことである。ここに書かれた年齢が「満」なのか「数え」なのかという問題については、この時に一緒にアメリカに留学した桑名藩主・松平定教の海外渡航証の控から類推すると、定教は安政四年（一八五七）四月三日生まれ、明治七年一〇月八日に発行、「齡 十七年五個月」とあるため、この渡航証の控の年齢は「満」で書かれていることがわかる。つまり重格の生年月日はこの渡航証の控から換算すると、「墓碑文」にある嘉永五年八月ということになる。

また重格という名前のヨミであるが、同じく渡航証の控には「シケタ、」とあり、このことから現在専修大学では「しげただ」と読んでいるが、ご子孫の方々からは「じゅうかく」と呼んでいたというようなお話をいただいた。重格の三男である重次のヨミが、「じゅうじ」であることから考えれば、「じゅうかく」というヨミであったことも十分に考えられる。

このように重格のヨミ、生誕地、生年月日は未だによくわかっていない。今後もこの点については調査を続ける必要があるだろう。

3. 桑名藩と戊辰戦争・北越・東北戦争と駒井重格

重格の幼少期についてはほとんどわかっていない。どのような教育を受けたのか、どんな子供時代だったのか、現在のところ全く不明である。「墓碑文」に「君年甫十五嗣家、翌年戊辰乱起、君属藩兵隊、転戦各地」とあるように、生年月日を「墓碑文」にある嘉永五年とするならば、慶応三年（一八六七）、一五歳（数え）で家督を継ぎ、戊辰戦争に桑名藩兵の一員として参戦したことが判明するのみである。しかも「小伝」では「駒井先生は、鳥羽伏見の緒戦には当然参加したであろうが、その後の足跡については、今までのところ全然わかっていない」とある。

しかし今回の調査によって、戊辰戦争における重格の足取りについて新たに判明したことがいくつもある。それを踏まえたくて桑名藩軍の動きを追ってみることにする¹⁴。

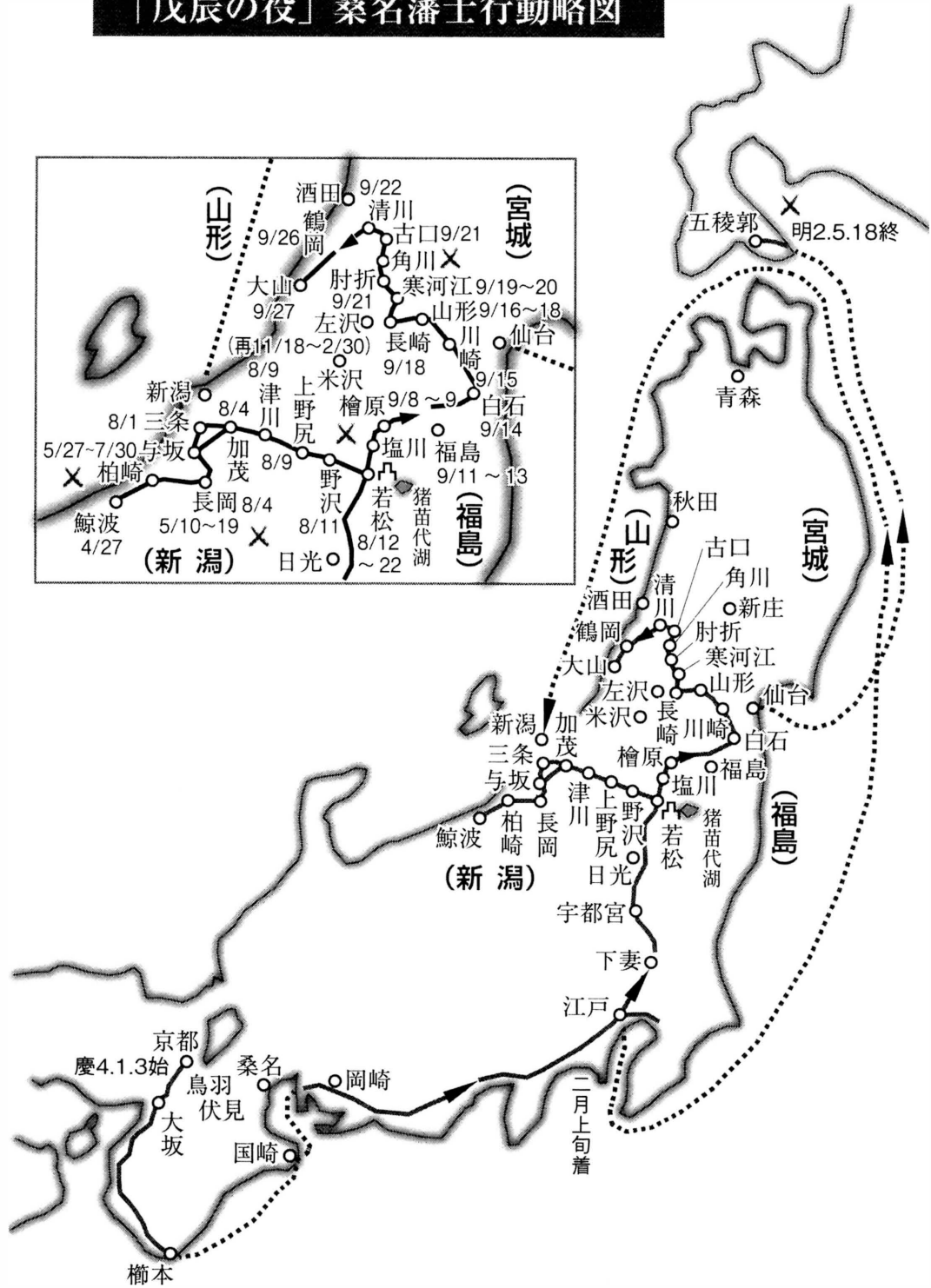
幕末、京都において重要な役割を果たした「一会桑」¹⁵の一つ桑名藩は、戊辰戦争においても、徳川幕府軍の主力として、会津藩とともに新政府軍と戦った。

とはいえ、幕府軍が鳥羽・伏見の戦いで大敗を喫し、桑名藩主・松平定敬^{ただあき}が将軍徳川慶喜らとともに江戸に向か、た後の藩内の意見は、定敬の意見を取り入れ、新政府軍と戦い続けるか、それとも形勢有利な新政府軍に従うかの二つに分かれる。一旦は、藩主とともに幕府軍で戦うことに逮されたが、その後も意見の対立は続き、藩主のいなくなった桑名城は、先代当主・定猷の遺児・万之助（後の定教）を当主にして新政府に従おうとした者たちによって明け渡されることとなった。

その一方で、定敬は桑名藩飛び地領の越後柏崎へ赴く。定敬に従う藩士たちは、柏崎に集結し、北陸・東北地方で新政府軍と激しい戦いを繰り広げるのである。このように桑名藩内の動向は幕府側について参戦した会津藩や庄内藩などと同様に藩内一致で戦いに向かた訳ではなかった。

桑名藩は鳥羽・伏見の戦いから始まる戊辰戦争に当初から軍を派遣していたが、重格の名前が史料上確認できるのは、慶応四年（一八六八）閏四月に定敬が柏崎の地において軍制改革を断行し誕生する「雷神隊」「致人隊」「神風隊」「大砲隊」のうち「神風隊」隊士のなかにみえる御馬廻「駒井強介」¹⁶からである。それ以前の鳥羽・伏見の戦い、宇都宮城の戦いなどに参戦していたかどうかは確認で

「戊辰の役」桑名藩士行動略図



郡義式『シリーズ藩物語 桑名藩』より転載

きなかった。

桑名藩軍の柏崎からの行程については「行動略図」の通りであるが、重格が属した「神風隊」は鯨波（新潟県柏崎市）、朝日山（同小千谷市）など北越戦争を戦い、会津若松の戦いを経て、寒河江（山形県寒河江市）において新政府軍と激しくぶつかりあう。そして負傷した多くの仲間たちと日本海側に逃れるも、大山（山形県鶴岡市）で謹慎し、翌年帰藩の途についていたのである。

寒河江、そして大山における桑名藩軍の動向を簡単に振り返ると、明治元年（一八六八）九月二〇日払暁、寒河江において、庄内藩・桑名藩を中心とした徳川幕府軍、米沢藩・薩摩藩を中心とした新政府軍が激突した。当初は寒河江市街において争ったが、数に劣る幕府軍は次第に退却を余儀なくされ、長岡山に立てこもり、陣を敷く。ここにおいて両軍から多数の犠牲者を出した「長岡山の激戦」と呼ばれる戦いが繰り広げられたのである。

この寒河江における戦いで亡くなった桑名藩士二八名の墓が寒河江市内の陽春院に残っている。これは当時の陽春院住職・大観和尚が弔いのために戦死者の遺骸を寺院に埋葬していたことを知った松平定敬と旧藩士二四人が、七回忌にあたる明治八年（一八七五）七月に境内に墓碑を建立し、彼らの名前を刻んだものである。

寒河江での敗戦で多くの負傷者を出した庄内・桑名藩軍は、庄内藩領・鶴岡へと向かう。しかし九月二二日、会津鶴ヶ岡城が開城、藩主・松平容保が新政府軍に投降した。そして同月二五日に庄内藩

主・酒井忠篤も投降したため、桑名藩軍ともに投降し、ここに桑名藩主力軍の戊辰戦争は終結する¹⁷⁾。

投降した藩士たちは鶴岡城下から少し離れた大山で謹慎することとなった。大山は、幕府の天領として、また秋田と新潟を結ぶ羽州浜街道の宿駅とし、発展し、酒づくりの盛んな地域でもあった。この大山謹慎の桑名藩士のなかに駒井重格もいた。

「桑名藩兵宿割帳」¹⁸⁾や「桑名様御人数調」¹⁹⁾によると重格は「小布袋屋金右衛門」宅に桑名藩士を含めた二七人とともに一〇月一八日から止宿していたことがわかる。また重格は負傷していたらしく、大山に滞在していた桑名藩負傷兵四九人を治療するために使用した薬の種類および数量が書かれた史料「桑藩御数人病人取扱薬数調帳」²⁰⁾によると散薬五包と水薬三本が与えられている。

このように桑名藩士約一七〇名は、寺院や村役人などの家に分宿しながら、時には傷の手当や夜具・布団の提供を受けるなど、村民たちによる手厚い保護を受け、翌明治二年丹末まで逗留した。

重格が属した「神風隊」の隊長であり、小布袋屋金右衛門宅にて重格と同宿していた町田老之丞が書き残した手記「老之丞手記」²¹⁾には戊辰戦争時の「神風隊」の動向や大山謹慎中の様子、そして大山から東京への道中などが記されており、それによると三月一日に大山を出立し、東京へ向かったとある。重格も同行程をたどったと考えてよいだろう。約六ヶ月の大山逗留であったこともあり、「老之丞手記」には「旅宿ノ者共別レヲ惜ム事親友ニ不異、情義ノ厚キ

事可感」とこの地の人々への情の厚さに感激している文章も見られる。

そのほかこの手記には大山滞在中の様子が書かれており、大山には病院があったことも記されている。

大山ニ我藩ノ病院アリ、此カ、リニ大山旧来ノ医師栗本道意、悴節庵ノ兩人ナリ、親道意ハ温順ノ人、悴節庵ハ頗ル慷慨家ニシテ、英学ヲ横浜ニテ一ヶ年ホト習ヒ、葉モ出来ル様子ナリ、越後路^ヲ出張イタシ居、余等知己ナリ、病人ノ世話 勿論、我輩ノ義気ヲ慕ヒ、屢招カレ種々馳走ス事 実情顕レタリ。病人ノ小遣トテ金五拾両ヲ病院ニ付ス

この文章からはこの病院は桑名藩が建てた病院なのか、桑名藩士のための病院なのかは不明であるが、横浜で英学を学んだ医師たちが患者を診ていたこと、また彼らが病院の世話だけでなく、桑名藩士たちを招いて御馳走をふるまっていたことがわかる。このように大山では多くの人々が桑名藩の人々に同情的であったことを町田の手記から知ることができる。敗残兵という立場ではあったが、大山の人々への感謝の気持ちはおそらく重格の気持ちも町田老之丞と同様であったと思われる。

4. アメリカ留學時代・桑名藩主・松平定教と駒井重格

明治四年（一八七二）、重格は旧藩主・松平定教とともに上京する。その目的は英語を学ぶためであった。明治初年、新政府は欧米の最新の制度や文化の導入を目的に、将来有望な若者たちだけでなく、多くの華族や旧藩主たちにも海外留学を奨励していた。この時期海外へ旅立った人々は五〇〇人を優に超えるといわれている。

桑名藩もこのような時流に遅れをとるまいと松平定教のほか、随員として何人かの若者を留学させることとなった。その選ばれた若者のなかに重格がいた。

彼らはまず、横浜において英学修業を始める。この時、彼ら桑名藩士たちの教師となったのがブラウンである。

S・R・ブラウン Samuel Robbins Brown は、安政六年（一八五九）キリスト教伝道のために来日する。元治元年（一八六四）には横浜英学所で英学教授となるも、慶応三年（一八六七）に帰国。二年後の明治二年の再来日後は新潟英学校（現・北越学館）教授に、その翌年ほ修文館（後の横浜市学校）に招かれて横浜に戻る。英学修業を志した定教、重格、後述する諏訪頼敏らがブラウンに出会ったのは、横浜市学校教師時代であった。

明治六年（一八七三）、ブラウンが市学校を辞すると、彼らはブラウンに私塾を開いて自分たちを教えてくれるように懇願する。この説得に応じてブラウンが自宅に開いたのがブラウン塾であった。この間の事情を塾生でもあった植村正久は次のように述べている。

この家塾（ブラウン塾、筆者註）の開設に最も尽力したるは、旧桑名藩主松平定教を始めとし、同藩士駒井重格、諏訪頼敏、三輪信一郎、松浦岳蔵及び井深梶之助等なりしが、ブラウンは、遂に学生の懇望黙止しがたく、己れの住宅（山手二一番）裏手に新築せる書斎を教室に充てて、一家塾を開設するに至りぬ²²。

ブラウン塾には一五代加賀金沢藩主であり、後に岩倉使節団に随行しイギリス留学する前田利嗣、廃娼運動などに尽力したジャーナリスト・嶋田三郎、先に挙げた明治大正期のキリスト教指導者として名高い植村正久など多くの人々が学んでいる。そしてこのブラウン塾が現在の明治学院大学の源の一つとなっている。

横浜修業時代、その後アメリカに留学した桑名藩主および藩士たちを費用の面で支えたのが、戊辰戦争時に函館を脱出する定敬を援助するなど桑名藩にゆかりのある横浜の商人・平松屋（金子）寅吉であったといわれている。重格も横浜時代、平松屋に下宿していたが、平松屋については現在も不明な点が多い。石井勇次郎の「戊辰戦争見聞略記」²³には平松屋について次のように記されている。

亦寅吉ナル者ハ元我領地ノ北越刈羽郡柏崎在新道村ノ産ニシテ、君公御役中、御草履役ヲ役セシ也。今横浜ニ住居シテ唐者ヲ商フ忠志者也、君公函館ニ在ラセラルヲ聞ヤ大ニ心痛シ、何トカ

尽力シテ御進退ヲ定ト欲シ、遙ノ此地ニ渡海ヲシ大ニ尽力シ、後チ是カ為ニ航スルノ艦ヲ得タリ

これによると平松屋はもともと定敬の草履取りをしていたとある。この時期、横浜に居住して唐物商として活躍しているこの人物が定敬の函館脱出の際や定教の海外渡航の際の費用を用立てていたのではないかわれているが、詳細は不明である。

その後、一行は明治七年、アメリカへ出発する。この出発直前の二月二日に、父・重周に宛てた書簡²⁴が残っている。その内容は二日夕方に船に乗り込み、二三日に出発するので、寒さ厳しき折ご自愛くださいという家族の安否を気遣うものであった。重格二一歳の時である。この時、ブラウンがアメリカのニュージャージー州ニューブランズウィックに暮らす牧師・フェリスに宛てた重格の紹介文が残っており、やや長文ではあるが紹介する。

過去二年間、わたしのもとで学んだ生徒で、研究のため、合衆国に渡航する駒井君に託し、この手紙を差し上げます。同君は、先月、P・M・S・汽船のグレート・リパザック号で、当港を出帆した松平という青年の友人です。駒井は、以前、伊勢の桑名の大名、松平の家臣のひとりでした。ミセス・プライン「訳者注 横浜共立学園の創立者のひとり」が言われるには、松平にあなたあての紹介状と、バーテリー・ストップ六番館の

ルイス・アンド・ハート商会のファンニング氏にあてた紹介状とを渡しておいたそうです。わたしは、これら兩名の青年紳士に深い興味をもっています。駒井は一八歳で、松平は七歳です。ふたりともアメリカにほぼ10年間もどまり、日本に帰る前に大学を卒業したい意向です。ふたりは、いずれも善良でりっぱな青年です。どうか兩人に対し、アメリカに留学中、特別のご配慮にあずかりたく、お願い申し上げます。駒井は、なかなか明敏な青年です。……（文字不明）……健康ですが……にやまされています。松平も熱心な、忠実な……で、たとえ本人は……であるが、必ず教育を受けてくるでしょう。駒井にはニューブランズウィックへ行くよう勧めておきました。²⁵

紹介状という性質上、二人を誉めあげている点はあるかと思われるが、当時の重格の人となりを知ることができるだろう。この書簡をフェリスに渡すためにアメリカ到着後の二人はまずニューブランズウィックに向かったと思われる。

当時の留学生の多くはまず大学に入学する前に、入学に必要な学力を養うために英語や数学を学んでいたが、その代表的な学校としてラトガース大学の付属予備校、ニューブランズウィック・アカデミーがあった。二人もこの学校に学び、そしてその後、明治一〇年（二八七七）、松平定教と駒井重格はラトガース大学に入学し、定教は理学を、重格は経済学を学んだのではないかといわれている。た

だし重格の「履歴書」には「米国ニ渡航、中學²⁶ 後、回国私立学校ニ於テ経済学修業」とあるのみで学校名は記されていない。

ラトガース大学 Rutgers University はニュージャージー州にある州立大学で、一七六六年に創立された全米で八番目に古い歴史をもつ大学である。幕末か明治にかけて、ラトガース大学および大学附属の予備校ニューブランズウィック・アカデミーは多くの日本人留学生を受け入れ、また大学側も日本に教師を派遣するなど、日本の近代化に大きく貢献した。

定教や重格が学んだ前後の時期、ニューブランズウィック・アカデミーには後に親友となる専修大学創立者の一人・田尻稲次郎、岩倉具視の子息である具定^{ともさだ}・具経兄弟^{ともつね}、後に東京帝国大学総長となる山川健次郎らが、ラトガース大学には旧信州上田藩主・松平忠礼^{ただなり}の弟・忠厚や元海援隊隊長士・白峰駿馬などが学んでおり、日本人留学生によるコミュニティも形成されていたと思われる。

また、先の書簡からもわかるように、ブラウンもニューブランズウィック行きを勧めているようにラトガース大学との関係が深く、ブラウンに学んだ多くの日本人がラトガース大学に入学している。このような状況もあって、定教や重格はラトガース大学に入学したのであろう。

重格はここアメリカにおいて相馬永胤・田尻稲次郎・目賀田種太郎という、後にとともに専修大学を創立する仲間のほか、多くの日本人留学生たちと出会う。彼らは異国の地で自らが得知の識を、故郷

の若者たちに伝え、近代国家の建設を担う人材を育てることを願い、学校の設立を語り合った。

相馬永胤の在米中の日記²⁶には重格の名前が登場する。例えば明治一年（一八七八）四月二八日条には「駒井君が田尻の番に滞在しているので 午後僕は田尻の家に行った（原文は英文）とある。また「相馬永胤翁懐旧記」²⁷にも「予ネテ在米中田尻・駒井氏等ト相談シタル如ク、邦語ヲ以テ法律・経済ノ学ヲ教授スル」とあり、アメリカ留学中に彼らは学校設立について具体的な話し合いをしていたことがわかる。

重格の帰国時期について、『百年史』には「おそらく田尻とともに明治十二年八月に帰朝」とある。「履歴書」にも「全（明治）十二年帰朝」とあるが、重格の海外渡航証の控には異筆で「（明治）十一年十二月帰朝、十二月廿六日返納」、同行した定教の海外渡航証の控にも「十一年十一月八日帰、全十二月十三日返納」とある。重格とともに帰国したと思われる定教の帰国時期についてさらに述べると、相馬永胤の明治一〇年六月五日の日記には「清水（篤守）、朝比奈（一）、松平（定教）、森（不明）、妻木（頼黄）を駅に見送る」（カッコ内は筆者）とあり、この記事を信用すると定教の帰国は明治一〇年六月となる²⁸。定教が政府に対して提出した留学願を次に掲げる。

北亜米利加²⁹留学願

第五大区一小区

華族

従五位 松平定教

右³⁰昨年二月中、向一ヶ年間横浜³¹、英学修行願済ニテ

留学罷在候処、今般更ニ自費ヲ以テ北亜米利加国新約³²出發、

向三ヶ年間回国中ニテ英学修行奉願度旨申越候、此段私ヨ奉

願候也

留守心得

第四大区五小区

定教養兄

華族

松平定敬³³

明治七年九月

東京府知事

大久保一翁殿³⁴

この史料によると、定教の留学期間は三年間、明治七年に留学していることを考えると明治一〇年に帰国していてもおかしくはない。さらに、彼らが学上旨を取得していたかどうかとも実是不明である。

一九一六年に発行されたラトガース大学の卒業生名簿ともいえる

『CATALOGUE OF THE OFFICERS AND ALUMNI OF
RUTGERS COLLEGE (ORIGINALLY QUEEN'S COLLEGE)』

IN NEW BRUNSWICK, N.J. 1766 TO 1916』³⁰には松平定教および駒井重格の名前を見ることはできない。両者とも卒業はしていないものと思われる。³¹

この時期の「海外渡航証」が現在のパスポートほど入国帰国記録とし正確を期していたかは不明であるが、彼らの帰国時期についてもこのように諸説あることを明記しておく必要があるだろう。

なお、この留学中の明治八年、駒井家は重格の名前で三重県に対して家禄の返還を申し出ている。重格の名前で提出した理由としては、すでに家督を継いでいたためであろうが、還禄の理由についてははっきりない。「還禄ノ輩願書綴」³²を見るとこの時期多くの旧藩士たちが家禄返還を行っている。おそらく明治八年九月に発行された金禄公債を受け取るためと思われるが、以後、重格は三重県士族ではなく、東京府士族という肩書きを用いている。

5. 専修学校の誕生と創立者・駒井重格

帰国後の重格は、相馬・田尻・目賀田らと同じ家に暮らし、経済学書の翻訳を進めながら、アメリカで夢見た学校建設に向けて動き出す。

明治二年（一八七九）十一月三日の相馬の日記には「田尻氏、駒井氏が来て、我々は学校の設立計画について話し合った。我々買いたいと望んでいた家見 に行き、契約者に会いに出かけた」（原文は英文）とある。ここに書かれた「家」とは目賀田と相馬が

開設した南紺屋町（現・中央区銀座）の法律事務所であり、この建物の二階に重格と田尻が住むことになったのである。

また、帰国後の重格の動向を、明治後期から昭和前期にかけ活躍した経済史家・平沼淑郎は次のように書き残している。

小生が経済学の学習を始めたのは、明治十二年より三年にかけてのことで、今日の第一高等学校の前進東京大学予備門であった。講師は、今の伯爵金子堅太郎先生で、フォーセット (Henry Fawcett) の「経済原論」を教科書として採用された。金子先生は中途眼疾のために職を辞せられ、故駒井重格先生がこれに代られた。これが小生の経済学学習の所謂手解きとも称すべきものであった。³³

平沼の記憶によると、重格は東京大学予備門において経済学の講義を行っているが、「小伝」によれば、金子堅太郎が講師をしていたことは確認できが、重格については確認できなかったとある。正規の講師ではなかったのかも知れないが、この時期、経済学を講じることのできた日本人は限られており、ほんの一時期であっても重格が予備門で講師をしていたとしても不思議ではない。

その後、四人は洋学の先達である箕作秋坪の協力を得て、箕作が開いた英学塾・三漢塾において法学や経済学を教える講座を開講、福沢諭吉の慶応義塾に夜間法律科を開講するなど、と学校設立

の準備を整えて行った。

明治一三年（一八八〇）八月、八人の若者が連署した「私立学校開業上申」と題された書類が東京府知事・松田道之宛に提出され、京橋区（現・東京都中央区）長・江塚庸謹（よのり）によつて受理された。署名捺印した八人の名前は相馬永胤、金子堅太郎、津田純一、高橋一勝、目賀田種太郎、山下雄太郎、田尻稲次郎、駒井重格である。

この上申書は、専修大学の前身にあたる「専修学校」が社会に向けて初めて学校名と教育内容を公表した最初の書類である。八月○日には『東京日日新聞』に学生募集の広告を出しているが、経済学教員には、田尻稲次郎と駒井重格の名前を見ることが出来る。

そして同年九月一六日、京橋区南鍋町（現・中央区銀座）にあった簿記講習所において開校式が行われ、ようやく彼らは念願であった新しい近代的な法律学・経済学を日本語で組織的に教授する私立学校・専修学校³⁴を誕生させた。当時、日本で経済学を組織的に教える学校はなく、専修学校は日本で初めて近代的な経済学を教授する高等教育専門機関としてスタートした。

重格は、専修学校経済科講師として教壇に立ち、生徒に「経済考徴」「経済要論」といった講義を行う一方で、校主惣代として専修学校の経営や学校の規定づくりに携わった。相馬や田尻といった他の創立者が重格の縫の才を認めたくえで、彼にその任を頼んだとある。

重格のこの時の役割については、後年、目賀田種太郎が当時の様

子を次のように語っている

更には一つ学校と云ふことに名を更へて、今少しく体裁を備へたいものだ、丁度此の田尻君の最も親しまれて居った所の駒井重格君も其の時分から一緒でありまして、「一体さう云ふアドミニストレーション、即ち経営の事は駒井が最も得手であるから、駒井に頼んで学校の経営、学校の規定、学校の維持、此等は先生に頼まう」と云ふ所よりして、駒井君が其の事に當つて、之が後に此の専修学校になつたのであります。³⁵

重格は、自らの右腕として同じ桑名出身であり、ともにブラウン塾で英学を修業した諏訪頼敏を招いて塾監とし、二人で専修学校の経営の任にあたった。彼らの献身的な働きは創成期の専修学校を縁の下から支え、その後の経営基盤を作り上げたといえる。

諏訪はその後、明治一九年（一八八六）、重格が病氣のために学校経営から離れると、その跡を継ぎ、東京帝国大学など他の学校との事務交渉などを行ったといふ。

このように、重格は他の三人の創立者とは違う、または彼らができなかつた役割を担うこととなつたのである。もちろんこの時期、重格だけが、生業をもっていなかつたということもあるが、適切な学校運営という彼の能力はその後の岡山赴任時代、高等商業学校長時代にも発揮されることとなつた。

専修学校が設立目的とした法律学・経済学の教育という点について述べると、明治一〇年代から二〇年代にかけて東京、そして大阪や京都に私立法律学校が次々と設立される。これらの学校は校名に「法律学校」とあるが、法律学だけを教えていた訳ではない。明治一四年（一八八一）に開校する明治法律学校（現・明治大学）は「法律経済二学科ヲ教授ス」ることを設置目的としている。また明治一九年に開校した関西法律学校（現・関西大学）の設立時の広告には「汎く内外の法律及び経済学を教授す」とあるように、法律学校の多くは法律と経済の専門学校としてスタートしたことがわかる。つまりこの時期、それほど経済学は必要とされていたのである。

その意味では、重格は当時、アメリカから最新の近代的な経済学を持ち帰ってきた人物として田尻稲次郎と並ぶ希有な存在であった。

6. 岡山赴任、そして官僚へ

アメリカ留学時代以来の念願であった専修学校を設立した一年後の明治四年九月重格は岡山中学校（現・岡山県立岡山朝日高等学校）および岡山県師範学校（現・岡山大学教育学部）の教員兼校長として岡山に赴任する。さらに翌年三月には岡山県商法学校校長も兼任する。岡山県商法学校は明治一三年、岡山商法講習所という名称で設立された商業学校で、重格が着任した明治一五年（一八八二）三月に岡山県商法学校と改称、翌年に廃校となった学校である³⁶。重格の岡山在任期間はわずか一年に過ぎなかったが、この時の生

徒たちの回想録からは教育熱心であった重格の姿が浮かび上がってくる。

重格はこれらの学校で英語や経済学を担当した。その姿のある生徒は「端正理知の人格者」と称し、経済学を教えるその姿は豊富な知識に裏付けられ、余裕と自信に充ち溢れていたと回顧している。

後に官僚として社会事業、特に救済制度の確立に尽力した窪田静太郎は当時の様子を次のように述べている。

漢学は旧藩時代からの碩学山本源弥先生が史記や八家文や春秋左氏伝を授けられ経済学は校長駒井重格先生（経済学を米國にて学び後年大蔵省国債局長たり）が「フォーセット」の小経済書を教科書として授けられたが教へる方は豊富の学識を以て綽々なる余裕と自信を持して熱心に教へられ学ぶ方は何れも皆渾身の緊張を以て而も教師に十二分の尊敬と信頼を払うて学んだのである。³⁷

この窪田の思い出にあるように岡山中学校校長時代の重格はフォーセットの著作を用いて経済学を講義していた。また英語の授業では、後に醸造試験所に勤め日本酒やビール醸造技術の発展に寄与した佐藤寿衛が「駒井先生にはウキルソンのリーダーを教はり」と述べているように「ウイリソン、リーダー」を教科書として用いていた。

重格は明治一三年三月に『自由保護貿易論』という翻訳書を出版

している。この原著者がフォーセットHenry Fawcettである。フォーセットはケンブリッジ大学の経済学者で、グラッドストーン内閣の通信大臣として小包郵便制度を設けるなど政治家としても活躍した人物である。彼の著作には『自由保護貿易論』のほか『玉氏経済学』という初心商けの経済書があり、原書および訳書ともに多くの版を重ねている。岡山中学校においても、専修学校と同様に重格は自らがアメリカで学んできた最新の経済学を教えていたことがわかる。また「ウィルソン・リーダー」も明治初期の英語教科書として非常に多くの学校用いられた教科書である。翻訳本は明治六年に『小学読本』という書名で刊行され、ほとんどすべての府県で使用されたといわれている。重格は英語の基礎を教える教科書として最適と考え、これを用いたのだろう。

そのほか重格の教育観が表れている文章が同じく佐藤の当時の思い出のなかにあるので、紹介しておこう。

駒井先生の意見とし、猶ほ当時の一子供として私の記憶に存することは師範と中学との順序は果して其の何れを先きにすべきやにつきましては先生の意見としては師範は小学校の教師養成を目的とするものなるも中学の方は之れより後大学を卒業する筈のものなるを以つて中学を先きにすべきものなりとて自分は岡山県中学校兼師範学校校長なりと固執せられたることを記憶してをります。³⁸

このように重格にとっては中学校と師範学校は明確に区別されるべきものであった。専修学校という経済・法律の専門学校を興した重格にとって、専門教育機関である大学に進学するの教育を施す中学校の意味は非常に大きなものであったと思われる。だからこそ彼は些細なことかもしれないが、その順番にこだわったのだろう。

このように経済や英語を教えていた重格であったが、在岡わずか一年あまり滝京することとなった。当時、岡山においても盛んであった自由民権運動に学校自体が巻き込まれ、重格もその煽りを受け、退任することとなったためである。

岡山中学校生徒・村木正則は当時の自らの状況を振り返り、「僕が中学在校時代に当時勃興した自由党の自由主義にかぶれ、政客中の中に伍して盛に各所に演説を試み、圧制政府の顛覆すべきを絶叫した」と述べているように、当時、岡山県下でも隆盛を誇っていた自由民権運動が岡山中学校にも吹き荒れていたことがわかる。そして村木は「老書生の緑り言」と題した回顧録のなかで次のように回想している。

校長駒井重格先生を放逐したのも僕等の仲間であった。処が因果応報てふものは争はれぬもので、僕が明治二十四年東京の帝大を卒業して間もなく、大蔵省試補を命ぜられ参事官室勤務になつたので、挨拶に出掛けて見ると参事官の筆頭席に堂々と控

へて居られるのが駒井先生なのであった。先方では往年の事など最早忘れて居られたかも知れぬが放逐した旧校長に直面した僕は冷汗三斗を禁じ得なかつたのである。⁴¹

この文書にあるように重格の校長退任が、生徒たちによる排斥運動の結果であったどうかは定かでない。しかしながら重格が校長を退任したわずか一〇日後の明治二十五年九月二十六日の『山陽新報』には「岡山師範学校の一変動」と題した記事が掲載され、その後二回にわたって騒動の続編も掲載されている。この時期学校自体が揺れ動いていたことは間違いない。

この新聞記事によると学生たちが校長の自宅に押し掛けるなど、かなり校長を責め立てており、先の村木の話が本当であったとしてもおかしくはないほど、この時期学生たちの運動が激しかったことを物語っている。

岡山から帰ってきた重格は、明治二十五年二月に大蔵省に採用される。以後、亡くなるまで重格は大蔵省、そして農商務省の官僚としての仕事に従事する。官僚時代の重格の功績は後述するが、この間重格がどのような役職に付いていたかは「履歴書」に詳しく、年表に記した通りである。

官僚としての重格は親友である田尻稲次郎や後述する後輩の阪谷芳郎や若槻礼次郎に比べると決して出世コースにいた訳ではない。それどころか阪谷や若槻の方が遙かに先に要職についている。その

要因の一つとして彼らと違って学士号をもっていなかったことが考えられる。それでも重格は田尻や阪谷のもとで政策立案に尽力し、彼らを支えていた。そのような重格の姿を若槻は次のように自伝に記している。

参事官が駒井重格と早川千吉郎、試補が水町（袈裟六）と私とであった。駒井という人は、田尻さんと一緒にアメリカへ留学していたとかで、なかなか頭の良い、リベラルな人で、決して盲判を押さない、廻って来た書類は必ず眼を通して、これはダメだとか、当事者を呼びつけてガミガミやるというやり方で、われわれはこの人を多いに尊敬していた。（カッコ内は筆者）⁴²

後に第二五代および第二八代総理大臣となるなど明治・大正・昭和という長きにわたって官僚、政治家として活躍した若槻礼次郎は、重格の大蔵官僚時代の部下の一人であり、公私ともに重格と親交があった。

明治二十五年（一八九二）七月、東京帝国大学を首席で卒業した若槻は、当時、大蔵次官を務めていた田尻稲次郎の推薦で大蔵省に入省する。この時の参事官が重格であり、若槻と重格の関係はこの時から始まる。若槻は重格を「頭の良い、リベラルな人」と捉えており、多くの同僚たちが上司である重格を尊敬していたと記しているのである。

また重格は若い頃から健康のために弓を引くことを心掛けていたが、若槻は当時、登庁前に重格の家に寄って、その指導のもと、毎日弓を引いたという。若槻と重格が職務だけでなく、プライベートでも付き合があったことをあらわすエピソードの一つといえる⁴³。

若槻と駒井家の付き合いは、重格の子息・重次にまでおよび。昭和七年（一九三二）月に衆議院議員に重次が立候補した際にも、「わが恩人の遺子 駒井重次君の当選を望む」という談話が新聞に掲載され、重格を「わが恩人」と呼んで彼の応援を行っている。

7. 高等商業学校長としての駒井重格⁴⁴

明治三二年（一八九九）三月二五日、重格は高等商業学校第五代校長兼大蔵省参事官に任じられた⁴⁵。高等商業学校では前任校長の清水彦五郎が学生の排斥運動によつて職を辞して以来、七ヶ月の間に平島精一、高田早苗、沢柳政太郎の三人が校長事務取扱を務めるという事態が続いていたが、ようやく正式な新校長として重格を迎えることとなった。

高等商業学校に着任した重格は数々の改革に着手し、附属外国語学校の分離独立（後に東京外国語大学となる）、専攻部課程の延長、商業学十号の設置などを実施した。「ベルリン宣言」という通称で知られる、ヨーロッパ留学中の高等商業学校教員たちが商業大学設立を訴えた「商科大学設立ノ必要」が発表されたのも、重格の在任中である。駒井校長のもと、高等商業学校はその内実を充実させ、

高等商業教育機関への道を着実に歩んだ。

そのような高等商業学校長としての重格の事績のうち、特筆すべきものとして、専攻部の充実と商業学十号の設置を挙げることができる。

高等商業学校専攻部は、高等商業学校卒業生が専門的な学問を修める課程として、明治三〇年（一八九七）に設置された。設置当初は一年間の課程だったが、重格はそれを二年に延長して教育内容の充実を図り、専攻部卒業生に商業学十号を授与するよう学制を改正した。以後、専攻部は学界のみならず実業界・官界にも人材を輩出して高等商業学校の社会的評価を高め、大正九年（一九二〇）、高等商業学校は悲願の大学昇格を果たしたのである。

主な専攻部出身者を挙げると三浦新七（明治三四年卒、第二代東京商科大学長）、上田貞次郎（明治三五年卒、第三代東京商科大学長）、出淵勝次（明治三五年卒、外務次官）、佐藤尚武（明治三八年中退、外務大臣）、来栖三郎（明治四二年卒、駐独大使・駐米特命全権大使）、天羽英一（明治四五年卒、外務次官・情報局長総裁）、石井次郎（大正三年卒、副総理）などがある。外交関係で活躍した人物が多いのが特徴といえよう。

大学昇格の機運が高まる最中の明治三四年（一九一）一二月九日、重格は持病である喘息から肺炎をこじらせ、急逝する。四八歳という若さであった。大蔵省参事官であり、高等商業学校長であった重格の突然の死は、多くの新聞でも追悼記事として掲載された。

重格の死に対して、高等商業学校は校葬を行い、『一橋五十年史』⁴⁶には、その様子を「学生代表が弔文を読んだ時学生は又も涙をそそられるのであった」と記している。

このように重格の突然の死を多くの人々が嘆いたが、そのような人物の一人に福田徳三（一八七四〜一九三〇）がいる。吉野作造や河上肇と並ぶ大正デモクラシー期の代表的知識人・福田徳三は、明治三四年に留学先のドイツから帰国した直後、高等商業学校の現状について重格に不満を訴えた。それに対して重格は、我が校は二流の校であり、まずは教師が博士になって学校の名を世間に知らしめなくてはならない、「私も西洋から帰って岡山の校長になつたときは、アナタの今の言と同様なことを言つて居ました。然し年を取つて御覧になると又考も変わります」と論じたという。この時は反発した福田だったが、重格の没後〇年間の東京高等商業学校の発展を振り返り、重格の言が正しかったことを認めて重格を「何等の割引なく一の申分なき名校長」「我校中興の恩人」と評した⁴⁷。

福田はそのような重格の恩に報いるべく、重格の〇〇年忌に合せて自著『経済学教科書』を重格に捧げたほか、肖像画の制作も中心になって取りまとめている。

大正四年（一九一五）の東京高等商業学校（明治三五年に高等商業学校より改称）の卒業アルバムには、神田一ツ橋校舎講堂の写真が掲載され、その講堂には肖像画が四枚掲げられている。駒井重格、学園の最大の後援者である渋沢栄一、創立者である森有礼、そして

一橋大学の源流とされている商法講習所初代所長・矢野二郎の四人である。このことは重格が当時の東京高等商業学校において渋沢、森、矢野と並ぶほどに功労者として高く評価されていたことを意味している。

この肖像画は先ほどの福田徳三が中心となって制作費を集めて作成されたもので、大正元年（一九一二）九月二日に講堂に掲げられたが、関東大震災の折りに被災したと思われ、現存はしていない。重格の高等商業学校校長在任期間はわずか三年に満たなかったが、このように駒井重格の名は高等商業学校が大学へと昇格する礎を築いた名校長として学園史に刻まれている。

8. 官僚・経済学者としての駒井重格の功績

これまで重格の生涯を振り返ってきたが、最後に重格が官僚として経済学者として何を行ってきたのかについて述べ、彼の功績を明治期の経済学史や政策のなかに位置づけることとする。

官僚や経済学者としての重格の側面を考える際に、田尻稲次郎（一八五〇〜一九三三）の存在を抜きに語ることはできない。兎井は、重格と同じく専修大学の創立者の一人であり、大蔵官僚として大隈重信（一八三八〜一九二二）や松方正義（一八三五〜一九二四）を補佐し、彼らのブレーンとして、いわゆる「松方正義」の中心的役割を担い、わが国の金融・財政制度の確立に尽力するとともに、晩年には東京市長も務めた人物である。

田尻は経済学教育者としても多くの高等教育機関で講義を行っていた。専修学校では生涯教壇に立ち続け、東京帝国大学、東京専門学校（現・早稲田大学）、学習院、高等商業学校などでも経済学や財政学を教えている。明治期を代表する経済学者の一人といつてよいだろう。

田尻を知る人々は、彼の企画や文書の多くは、重格の助力によるものであったと口々にいう。英語やフランス語など語学に堪能であった重格は、数多くの翻訳書を田尻とともに残しており、その才能と協力があつたからこそ、田尻は大きな仕事をなし得たといえる。

田尻は生涯を通して非常に多くの著作物や翻訳書を残しているが、代表作に『財政と金融』という大著がある。その緒言⁴⁸には次のようにある。

財政金融の關係は世運の進歩と共に年々新相を生じ月に繁多を加へ、正に刻下研究を要すへき一大問題たり、于時 神武紀元二千五百六十年即ち西曆千九百年に当り、將に文明の新紀に臨まんとし、此の如き明治の聖代に遭遇し、我國文武の機運大に發達し、將來斯道の教育亦之応するの方針を取らざる可らず、是に於て東京高等商業学校夙に時勢に鑑み、大に其学科を拡張し、新に財政金融の一科を加へ、余に囑するに其講筵を以てす、余欣然之を諾し、聊か考慮する所あり、速記技手を請備し、以て毎筵講述する所を速記せしめ、訳文正に成るを告ぐ、（後略）

この緒言にあるように 東京高等商業学校が「財政金融」という授業を開講するにあたり、田尻に講師をお願いしその講義をまとめたものがこの本であった。この時に田尻に講師を依頼したのが重格である。

この本は重格が亡くなった明治三四年に刊行され、大正七年（一九一八）までに田尻の手によって増補・改訂が繰り返され、ついには三〇版を重ねている。三〇版は乾坤二冊合わせて 七四六ページにも及んだ。

同書の「第十四版」緒言に「世運の進歩と共に本書掲載の事項年に加はり月に新たなり」とあるように田尻は日の実務から生まれた課題などを、自らの理論と常につき合わせ、日々最新の成果をこの書に反映させていた。つまり理論と実践の書であった。

先に述べた 福田の駒井追悼文「故駒井先生の十周年忌に際して」に次のような文章がある。

田尻先生畢世の大著『財政と金融』は誰知らぬものもあるまい。然し抑も此大著述が成立つたは駒井先生用意の結果であつて、而して此大著述は或意味に於て我校の専攻部の産物たることを知る人は幾人かある。博士独特の講義は我専攻部に十年（否十二年）一日の如く継続され、其講義の筆記が日本経済学界の大著述になるに至つた端を開いたは駒井先生である。

(表) 明治10年代に刊行された田尻稲次郎および
駒井重格著作の経済科教科書

著者	書名	発行所／出版人	発行年日
田尻稲次郎	ポリユー財政論 関税ノ部	田尻稲次郎出版	年1月
田尻稲次郎	ポリユー財政論 地方税ノ部	田尻稲次郎出版	明治 年1月
田尻稲次郎	セボン貨幣論	専修学校発行	明治15年1月
田尻稲次郎	マクラウド銀行史	専修学校発行	明治15年8月
田尻稲次郎	ポリユー国債論	専修学校発行	明治15年11月 15年10月 4月
田尻稲次郎	グーゼン外国為換論	専修学校発行	明治15年11月
田尻稲次郎	マクラウド銀行誌 上下	専修学校発行	明治16年1月
田尻稲次郎	ポリユー国債史	専修学校発行	明治17年3月
田尻稲次郎	経済学 貨幣之部	忠愛社発行	明治17年6月
田尻稲次郎	経済学 原論之部	忠愛社発行	明治18年1月
駒井重格	フォーセット自由保護 貿易論	駒井重格出版	明治13年11月
駒井重格	経済学 原論 ル原著	専修学校発行	明治15～16年
駒井重格	グーゼン外国為換論	専修学校出版	明治16年4月
駒井重格	ポリユー歳計予算論	専修学校発行	明治16年7月
駒井重格	ケアンズ原著経済要論	専修学校発行	明治18年4月
駒井重格	外国貿易之理	専修学校出版	明治18年4月

田尻の代表作『財政と金融』の成立が「駒井先生用意の結果」「専攻部の産物」は福田の言い過ぎの感があるが、重格と田尻が学問上、そして人生において深く結びついていたことは間違いない。

専修学校設立時の経済科の教員は田尻と重格のみであったが、その後、大蔵官僚・中隈敬三や商業史を専門とする河上謹一なども講師として加わった。とはいえ、田尻と重格が中心的な役割を果たしていたことはいうまでもない。専修学校経済科がこの時期の経済学教育に果たした役割は、非常に大きなものであるが、田尻や重格が何を行ったのかを簡単にみていくこととする。

明治一五年度の東京大学文学政治学及理財学部のカリキュラムによると田尻稲次郎は第二学年を担当、教科書としては「フォーセット氏著理財学」「ミル氏著理財学」「ロッシェル氏著理財学」の三冊を使用している。また翌年にはルロア・ポリユーの財政学を講じている。

一方、専修学校経済科はどのような状況であったのか、明治一六年に、重格が訳し、専修学校によって刊行された『外国為換論』の緒言に「余専修学校ニ従事スル茲二年アリ、嘗て本邦経済ノ書ニ乏シク該校生ノ如キ頗ル研精ノ便ヲ欠クヲ憂フ、明治十三年ノ秋此書ヲ訳述シテ、以テ其便ニ供ス」と述べている。

田尻と重格は明治一〇年代だけで、経済科の教科書を一六冊刊行していることが現在確認できるとい⁴⁹。そのほかに経済科教科書とし⁵⁰中隈敬三や阪谷芳郎のものがあるが、二人の手による教科書

を見てみると、ポリュウやフォーセット、グリーンなどイギリスやフランスの経済学者の翻訳書をテキストとして、授業が行われていたことがわかる。東京大学において、雇い外国人であるフェノロサが教科書として使っていた原書を、同時期の専修学校では翻訳本を使って日本語で行っていた。また経済学関係の授業数も東京大学より多く、先駆的な試みがなされていたことがわかる。

しかも教科書の多くは専修学校生徒だけでなく、一般の人々も購入できるようになっていたことは、巻末に販売所が掲載されていることからわかる。彼らはこの時期の経済学教育において教科書の刊行が不可欠であると考えていたのである。明治初期の経済学教育における彼らの功績はこのことから十分うかがい知ることができらるだろう。

そのほか、彼らはこのような経済学教育と官僚としての実務が一体化していたこともその特徴の一つといえるだろう。その例としてフランス財政学の日本への導入がある。重格と田尻はルロア・ポリュウが提唱する自由主義的経済理論を通して、日本における財政学の基礎づくりに大きく貢献した。重格が翻訳して、田尻が校閲を行った『歳計予算論』は大日本帝国憲法の付属法である「会計法」の起草にあたって最も多く参照された文献であるといわれている。

明治二年（一八八九）に発布され、本帝国憲法の付属法である「会計法」の草案作成には専修学校の経済科講師であった田尻、中隈、阪谷、そして重格が参画している。専修学校経済科と大蔵省

が密接な関係にあったことはこのことからよくわかる。

阪谷芳郎は東京大学出身で、在学中に田尻の薫陶を受けた人物で、後に大蔵大臣や東京市長にもなり、専修大学二代学長、初代総長も務めている。「会計法」制定の中心的な役割を果たしていたのは阪谷であったが、彼を補佐したのが田尻や重格であった。

この時、大蔵大臣であった松方正義もポリュウの薫陶を直接受けた人物であった。彼の財政政策の理論的支柱となったのがポリュウが提唱するフランス財政学であったことが、田尻や重格にとって幸いしていたといえるだろう。

重格は、その後貨幣委員として金本位制度の導入問題にも、目賀田・田尻らとともに深く関わるなど、日清戦争前後の揺れ動く日本経済のなかで、フランス財政制度研究の第一人者として活躍したのである。

9. おわりに

重格没後の駒井家について簡単に触れて、本稿を終えることとしたい。重格には大蔵官僚後に衆議院議員を務めた子息、重次がいる。

駒井重次は明治二八年（一八九五）二月三日に東京で生まれた。金沢の第四高等学校（現・金沢大学）で、柔道部のメンバーの一人として全国制覇に貢献するなど大活躍した後、東京帝国大学経済学部商業科に進学。卒業後は重格の後を継ぐかのように大蔵省に入省した。

重次は税務署長や銀行検査官などを歴任した後、政治家に転身する。大蔵官僚出身らしく財政金融関係に明るく、当選は四回を数えた。重格と同じように、日本大学や愛知大学でも教鞭を執るなど、教育者としての側面ももっていた。

柔道家としては六段という段位をもつとともに、母校・第四高等学校のために作詞もしている。現在、駒井家の墓石のそばには重次が大正四年（一九一五）に作詞した第四高等学校の寄宿舎である時習寮南寮の寮歌「北の都に秋たけて」の歌詞が刻まれた碑が残されている。多才な人であった。

昭和七年二月九日、血盟団員によって射殺された井上準之助前大蔵大臣は、駒井重次の応援のために本郷の小学校に来ていた。この時重次は犯人を投げ飛ばしたことが新聞記事にも取り上げられるなど、ある意味、現在では父・重格よりも重次の名前のほうを聞いたことがある方も多かもしれない。

今回の「駒井重格の軌跡」展では、地元でもそれほど有名ではなく、専修大学や一橋大学の関係者にもあまり知られていなかった駒井重格という人物にスポットをあてた。重格は明治初期、アメリカにおいて経済学を学んだ数少ない日本人の一人である。そのような人物が私立学校として初めて経済科を併設して誕生した専修大学と官立（設立当初は私立）として初めての商業大学という歴史をもつ一橋大学の両大学に重格が関わっていたことは、明治期経済学教育を考えるうえで重要な問題といえよう。今回の展示が、多くの方々

に重格の生涯を知っていただく機会になってもらい、明治期の経済学史上、教育史上に、重格の業績を位置づけるような研究につながっていくことを、展示担当者の一人として願っている。

最後に今回、桑名市において開催した企画展「駒井重格の軌跡」では非常に多くの方々にお世話になった。ご子孫の方々はもちろん、資料所蔵者および機関、山形県や岡山県の調査の際にご助言・ご助力をいただいた各機関の方々など数え上げればきりが無い。学内に設置された駒井重格展プロジェクト委員会の先生方にもご苦労をおかけした。また遠くから会場に足を運んでいただいた専修大学や橋大学の関係者にもお礼を申し上げたい。

桑名市博物館、一橋大学附属図書館との初めての共同企画であったことあり、担当者として慣れないことも多く、両機関の関係者、特に担当者であった杉本竜氏（桑名市博物館学芸員）、杉岳志氏（一橋大学附属図書館専門助手）のお二人には多大なご迷惑をおかけしたことを思われる。この場を借りてお詫びするとともに感謝する次第である。

今回の調査や展示を終えてもまだ、駒井重格という人物について不明な点は多々ある。今後も駒井重格についての新たな情報をお持ちの方がいらっしやれば大学史資料課までご連絡いただければ幸いです。

【註】

- 1 小峰保栄「駒井重格先生小伝（附）専修商学論集第19号所載
「阪谷芳郎の学者像」補遺」（『専修商学論集』第二〇号 専修大
学学会 一九七六）
- 2 西羽晃「駒井重格について」（『美術館紀要』第一号 桑名市立
文化美術館 一九七九）
- 3 『専修大学創立者年表（一） 田尻稲次郎年表』（専修大学大学
史資料室 二〇〇〇）所収。そのほか『大学史資料叢書② ポリユ
ー
氏財政論 関税ノ部』（専修大学大学史資料室 二〇〇〇）、『大
学史資料叢書③ 自由保護貿易論』（専修大学大学史資料室 二
〇〇〇）、『大学史資料叢書⑦ 銀行史』（専修大学大学史資料室
二〇〇〇）にも「フランス財政学の導人と専修学校の人々」
（一）、「フランス財政学の導人と専修学校の人々」（二）、「フラン
ス財政学の導人と専修学校の人々」（三）が所収されている。
4 明治期の経済学史研究上で重格の業績そのものに注目した論文は
少ない。ただし猪谷善一「明治経済学史の一節・忘れられた経済
学者田尻稲次郎博士を中心として」（『諸学紀要』第一三三号
一九六五）のように田尻稲次郎を取り上げた論文があり、その中
で田尻を補佐した人物として重格の存在に触れているものや堀
経夫『明治経済思想史』（明治文献 一九七五）のように「自由
保護貿易論争」を取り上げた際に、重格の著作を紹介しているも
のはある。
- 5 桑名藩は、徳川譜代の大名であり、徳川四天王の一人として有名
な本多忠勝が、慶長六年（一六〇一）、上総大多喜藩より一〇万
石にて移封してきたことから始まる。松平越中守家（久松松平家
の一）が桑名藩主となったのは元和三年（一六一七）のことで、
藩主は家康の異父弟・定勝であった。その後、松平越中守家は五
代定重の時に越後高田藩へ移封。その間は奥平松平家が桑名藩主
となる。松平越中守家が桑名に再び戻ってきたのは文政六年（一
八二三）、「寛政の改革」の主導者である松平定信の嫡男・定永の
代であり、廃藩置県まで松平越中守家が藩主を務めた。
6 藤谷彰編『桑名叢書Ⅱ 天明由緒・桑名藩士の来歴』（桑名市
教育委員会 二〇〇八）
原本は桑名市立中央図書館が所蔵しており、全九巻から成る松平
越中守家の家臣三九七家の天明期までの由緒が記された史料。
7 『鶯宿雑記』および駒井鶯宿については、田口栄「『鶯宿雑記』
内容紹介と索引」（『参考書誌研究』第三六号 一九八九）に詳
しい。
8 定信周辺の文人たちについては、瀬戸口龍一「『甲子夜話』にみ
る松平定信文人サロンの動向」（『専修史学』第三三三号 二〇〇
二）に詳しい。
9 竹内秀臣氏旧蔵（専修大学大学史資料課に複写物あり）
10 西羽晃「駒井重格について」（『育友』第一一六号 専修大学育
友会 二〇〇九）

11 本稿の巻末には「駒井重格年表」を付したが、この年表は「履歴書」をもとに作成したものである。

12 現在、駒井家の墓は谷中霊園にあり、「墓碑文」は「駒井重格之墓」の側面に刻まれている。

13 昭和四九年一月二日に文京区より発行の複写物を専修大学大学史資料課にて所蔵

14 戊辰戦争における桑名藩の動向については、『桑名市史 本編』（桑名市教育委員会 一九五九）、郡義武『桑名藩戊辰戦記』（新

人物往来社 一九九六）、郡義武『シリーズ藩物語 桑名藩』（現代書館 二〇〇九）などを参考にした。

15 「一会桑」とは家近良樹氏が提唱した言葉であり、『孝明天皇と「一会桑』（文春新書 二〇〇二）には「一会桑という言葉であるが、これはまだ一般的には馴染まれていない馴染みのない言葉

かと思う。そこでごく簡単な説明をすると、一会桑とは、一橋慶喜、会津藩、桑名藩の頭文字をそれぞれとってネーミングしたものの」と述べている。

16 戊辰役旧桑名藩軍制（鎮國守國神社所蔵）

17 この時、藩主・松平定敬はわずかな手勢を連れて函館へ向かって

いた。定敬が函館を脱出し、横浜に到着したのは、幕府側の敗北を決定づけた五稜郭陥落のわずか一ヶ月前の明治二年四月のこと

であった。

18 鶴岡市郷土資料館所蔵

19 大滝直之助氏（鶴岡市）所蔵

20 鶴岡市郷土資料館所蔵

21 郡義武『桑名藩戊辰戦記』によると、この手記は町田老之丞の御子孫・町田喜久夫氏が所蔵されていたもので、喜久夫氏が亡くなっ

た後、子息の武夫氏より郡氏に寄贈されたとある。筆者がこの手記を見たのは鶴岡市郷土資料館が所蔵していたコピーである。

22 『井深梶之助とその時代 第一巻』（明治学院 一九六九）

23 『新選組史料集 続』（新人物往来社 二〇〇六）所収

24 竹内秀臣氏旧蔵（専修大学大学史資料課に複写物あり）

25 高谷道男編訳『S・R・ブラウン書簡集・幕末明治初期宣教記録』（日本基督教団出版局 一九六五）

26 専修大学大学史資料課には在米中の明治九年から亡く奪間 際の大正一三年までの相馬永胤の手による日記が残っている。

27 「相馬永胤翁懐旧記」（「相馬家文書」）専修大学大学史資料課蔵。この史料は相馬永胤が晩年に書いた自叙伝であり、平成九年に専修大学年史資料室より『相馬永胤翁懐旧記 翻刻版』が刊

行されている。

28 橋本五雄編『謝海言行録』（橋本五雄 一九〇九）で、妻木自らが語っているようにこの時期に神鞭知常らに説得されて妻木がアメリカから帰国していることは間違いない。しかし、この時の同船者に定教がいたかどうかは不明である。

29 国立公文書館所蔵

30 ラトガース大学図書館所蔵。現在はデジタルー カイブ化されおり、インターネット上で閲覧することができる。

31 石附實『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房 一九七二）

によると定教は明治一二年にラトガース大学理科卒業、重格はラトガース大学で学んだことになっているが、その根拠となる史料は記されていない。

32 三重県史 編さん室所蔵

33 平沼淑郎「経済学学習時代の思ひ出」(『経済史学』第三輯 早稲田大学経済史学会 一九三六)

34 専修大学の前身の名称。現在の名称「専修大学」となったのは大正八年のこと。

35 『北雷田尻先生伝 下巻』(田尻先生伝記及遺稿編纂会 一九三三)

36 廃校となった岡山県商法学校の後身として明治二一年に岡山県商業学校(現・岡山県立岡山東商業高等学校)が誕生している。

37 『創立六十周年記念会報』(岡山県第一岡山中学校々友会 一九三四)

38 前掲書

39 前掲書

40 『御大典記念会報 第十三号』(岡山県第一岡山中学校校友会 一九二八)

41 前掲書

42 若槻礼次郎『古風庵回顧録』(読売新聞社 一九五〇)

43 明治二八年七月四日、この時、愛媛県収税長として松山に赴任していた若槻から重格に宛てた書簡(竹内秀臣氏旧蔵)には、無沙汰を詫びるとともに、最近は弓の稽古も怠けがちで、教えてくれる人がいないため、自己流になってしまっていると重格に言い訳する若槻の言葉が残っている。

44 この章については、「駒井重格の軌跡」展にて使用した展示パネルの解説文(一橋大学附属図書館専門助手・杉岳志氏執筆)に多くを拠っている。

45 高等商業学校とは一橋大学の薙の学 校名称で、学校所在地の神戸一ツ橋にちなみ、「一ツ橋」「一橋」とも称された。

46 酒井龍男編『一橋五十年史』(東京商科大学一橋会 一九二五)

47 福田徳三は重格の。○周忌に「故駒井先生の十周年忌に際して」(『一橋会雑誌』第七五号 一九一一)という文章を書いている。

この段落の引用はすべてここから取ったが、この福田の文章には駒井の人となりのほか、功績なども書かれており、同時代人が書いた駒井評としては最も詳しいものといえるだろう。

48 田尻稲次郎『財政と金融 増補改訂第二十一版』(同文館 一九一一)

49 小峰保栄「明治初期の専門教育と専修学校の学課」(『専修商学論集』第二二号 一九七七)

◆ 駒井重格 年表 ◆

嘉永6年(1853)	11月	【0歳】	桑名藩士・駒井重周の長男として江戸(一説には桑名)に生まれる、幼名は強介・一郎 [※]
慶応3年(1867)		【14歳】	家督を継ぐ
慶応4年・明治元年(1868)			戊辰戦争に従軍
	9月		新政府軍に敗北、出羽大山(現・山形県鶴岡市)に謹慎
明治2年(1869)		【16歳】	桑名に帰郷
明治4年(1871)		【18歳】	東京本所(現・墨田区)の田口江村塾(塾長・田口文蔵)に入塾
明治5年(1872)		【19歳】	旧桑名藩主・松平定教とともに横浜市学校(校長・河村敬三)に入学
明治6年(1873)		【20歳】	S.R.ブラウン塾にて英学を修業
明治7年(1874)		【21歳】	定教に随従し、アメリカに留学
明治8年(1875)		【22歳】	ニューブランズウィック・アカデミーに入学
明治10年(1877)		【24歳】	ラトガース大学に入学
明治12年(1879)		【26歳】	アメリカより帰国
明治13年(1880)	1月		箕作秋坪の三叉塾内において経済学の講義を担当
	8月		東京府京橋区木挽町(現・中央区銀座3丁目)に学校設立のため、相馬永胤らと「私立学校開業上申」を東京府へ提出
	9月		専修学校(現・専修大学)校主惣代として京橋区南鍋町(現・中央区銀座5丁目付近)への「学校仮転御届」を東京府へ提出
	9月		専修学校の開校式を挙行
		【27歳】	東京大学予備門の理財学講義を担当
明治14年(1881)	2月		大蔵省に入省
	6月		大蔵省を退省
	7月		明治会堂で行われた専修学校第1回卒業式にて幹事を務める
	9月		岡山中学校および岡山師範学校に校長として就任
明治15年(1882)	3月	【28歳】	兼岡山県商法学校校長に就任
	9月		兼岡山県商法学校校長を退任
	12月	【29歳】	再び大蔵省に入省
明治16年(1883)	2月		長女・雪が誕生
明治17年(1884)	1月	【30歳】	父・重周が死去
明治18年(1885)	2月	【31歳】	次女・定が誕生
明治19年(1886)	1月	【32歳】	大蔵権少書記官に就任
	3月		大蔵省参事官に就任
	7月		従六位に叙せられる
明治20年(1887)	11月	【34歳】	文官普通試験委員に就任
			長男・一郎が死去
明治22年(1889)	5月	【35歳】	官制取調委員に就任
明治23年(1890)	1月	【36歳】	省令審査委員に就任
	6月		帝国議会交渉事務取調委員に就任
	9月		貨幣委員に就任
	12月	【37歳】	次男・強介が誕生(同月死去)
明治24年(1891)	12月	【38歳】	三女・花子が誕生(明治32年7月死去)
明治25年(1892)	2月		正六位に叙せられる
明治28年(1895)	2月	【41歳】	三男・重次が誕生
明治29年(1896)	6月	【42歳】	東京市区改正委員に就任
	10月		大蔵省国債局長兼大蔵省参事官に就任
	12月	【43歳】	大蔵省所管事務政府委員に就任
	12月		従五位に叙せられる
	12月		勲六等に叙せられ、瑞宝章を授与される
明治30年(1897)	4月		官制改正につき国債局長廃官
	5月		秩禄処分委員に就任
	8月		農商務省参事官に就任
	9月		臨時政務調査委員に就任
	10月		正五位に叙せられる
	10月		港灣調査委員に就任
	11月	【44歳】	農商工統計に関する特別調査委員長に就任
明治31年(1898)	2月		農商務省参事官を退任
	3月		農商工高等会議臨時議員に就任
	4月		大蔵省参事官に就任
	4月		臨時秩禄処分調査委員に就任
	9月		農商工高等会議臨時議員を退任
明治32年(1899)	1月	【45歳】	条約実施委員に就任
	3月		高等商業学校長(現・一橋大学)兼大蔵省参事官に就任
	4月		文官普通懲戒委員に就任
	6月		文官高等試験臨時委員に就任
明治33年(1900)	6月	【46歳】	勲五等に叙せられ、瑞宝章を授与される
明治34年(1901)	12月	【48歳】	肺炎のため死去、特旨をもって従四位・勲四等に叙せられ、瑞宝章を授与される

※駒井重格の生年月日は諸説あるが、ここでは一橋大学が所蔵する駒井重格履歴書に拠った